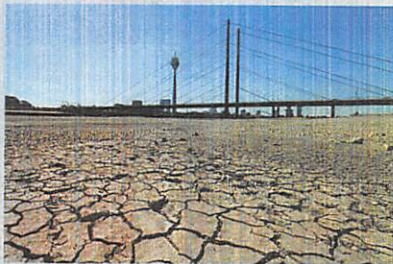


TOPIC

異常気象が連鎖した夏
これからの予測は？

この夏はヨーロッパも猛暑と干ばつに襲われ、ライン川の川底がむき出しに。

この夏の猛暑や大雨について、専門家でつくる気象庁の異常気象分析検討会では、「異常気象の連鎖」だったと表現した。気象庁の地球環境・海洋部 気候情報課 異常気象情報センターの予報官の新保明彦さんによると、西日本豪雨をもたらした梅雨前線の停滞も、猛暑をもたらした2つの高気圧も、偏西風の蛇行が影響して起きたという。

偏西風とは、約1万m上空を西から東に吹く風のこと。ヨーロッパやアメリカなども猛暑や干ばつに襲われており、偏西風が蛇行した地域と符合している。蛇行が起きると異常気象になりやすい傾向にあるが、なぜ蛇行するのか、原因はわかっていない。

人が体感する暑さや寒さ、雨や雪の多少などの変化は自然変動によるものも大きく、すべてが地球温暖化に起因するものとは言えない。しかし、横浜国立大学の准教授で気象学を専門とする筆保弘徳さんは、この夏の異常気象について、「地球温暖化も影響していると言わざるをえない」と話す。

地球温暖化というと、気温上昇だけをイメージしがちだが、実際はもっと複雑な影響をもたらす。

世界の平均気温はここ100年で約0.73℃上昇、日本では約1.19℃上がって

いる。気温が上がると、大気中の水蒸気が飽和しにくくなり、大気中の水蒸気量が増加する。そのため雨の頻度は減るが、一度に降る雨の量が増えることになる。「実際にデータを見ると、日本の年間降水量はここ30年くらい1500mm前後でほとんど変化していないが、頻度が減っている。短時間に大量に降るようになっている」と筆保さんは説明する。

威力が増し、 異例の進路を取る台風が増加

同じ理由で、台風も変化している。「温暖化が進むと台風の数は減少するが、発生する台風の威力は強くなるといわれている。実際に過去100年間の、日本に上陸した台風を調べると、数はほとんど変化していない一方で、上陸時の威力は年々増している」と筆保さんは話す。

さらに近年は、これまで来たことがなかった地域を襲う傾向もある。16年の台風10号は、気象庁が統計を取り始めて以来初めて、東北地方の太平洋側に上陸し、北海道や東北に大きな被害をもたらした。筆保さんによると、台風による被害は必ずしも勢力の大きさに比例しない。勢力が小さくても、台風慣れしていない地域が襲われると被害が大きくなる傾向があるという。これまで台風が来たこと

がない地域も、油断できない。

冬の長期的な傾向については、地球温暖化だけでなく、都市化によるヒートアイランド現象の影響も大きい。筆保さんは、「ヒートアイランド現象は、夏よりも冬の気温に影響しやすい。特に関東では冬の気温が下がりにくくなっており、雪も大幅に減っている」と説明する。

気象庁の予報では、この冬の気温は平年並みか、高くなる見込みだ。ペルー沖の海面水温が平年よりも上昇する「エルニーニョ現象」の発生が予測されていて、統計的にはエルニーニョになると暖冬になることが多い。

エルニーニョやラニーニャの発生時は、世界的に異常気象が起こりやすいといわれる。しかし、気象はまだわからないことが多く、新保さんも「特に異常気象の予測は非常に難しい」と話す。

筆保さんは、「地球温暖化が進むと、気候の振れ幅が大きくなり、厳寒や酷暑、大雨など極端な現象が増えるといわれている」と指摘する。「異常気象」といわれるような現象は、これからも起こる可能性が高い。「一番の防災対策は、関心を持つこと」と筆保さんは言う。「今まで大丈夫だったから」といった、過去の経験に引きずられることなく対策をすることが、これまで以上に求められている。W

2018年は記録づくめの夏だった

早い梅雨明け	観測史上初めて、関東甲信地方が6月に梅雨明け
記録的な高温	7月に埼玉県熊谷市で観測史上最高の41.1℃を観測
記録的な大雨	7月に西日本豪雨。月降水量が平年値の2~4倍になったところも
台風が異例の進路	台風12号が、東から西に日本列島を横断